



中国がわかるシリーズ 45 日本への襲来

ライフネット生命保険株式会社
創業者 出口治明氏

出口治明様よりご挨拶をいただきました。出口様にはこれまで長きにわたってご執筆をいただき感謝しております。出口様が今後、新しいお仕事で多いに活躍されグローバルなすばらしい若者たちを輩出されることを願っています。岡本和久

皆さん、こんにちは。

ライフネット生命の出口です。岡本さんのご好意で、中国の歴史について連載を続けてきましたが、このたび立命館アジア太平洋大学(APU)の学長に推挙され、2018年1月より別府に移住することになりました。

急なことで、僕自身が一番驚いています。当面は、大学の生活に慣れるのが精一杯だと思います。

勝手を言って、大変、申し訳ございませんが、中国の歴史コラムについては、しばらく休載させていただきたく存じます。これまでのご愛読、本当にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

出口治明

1259年、モンゴルに降伏した高麗は、1268年、使者となり、クビライの書をもって日本を訪れました。クビライの書は国交を求める穏便で丁寧なものでしたが、国際情勢に疎い鎌倉幕府は、その真意を理解出来ませんでした。ちょうどこの年、クビライは南宋攻撃を再開していました。日本への使節も、それに連動した動きであったのでしょう。クビライの使者は、何度も黙殺されたので、1274年、モンゴル・高麗軍は、博多湾に来襲しましたが、暴風雨にあって帰国しました(文永の役)。

1276年、クビライは、名将、バヤンを用いて、南宋をほぼ無傷で接收しました。南宋の経済力や海運力をそっくり手中に収めたクビライは、泉州のムスリム勢力(蒲寿庚など)と手を携えてさっそく海へと触手を伸ばしていきます。南宋では、文天祥が孤軍奮闘し、歴史に名をのこしました。1279年、鎌倉幕府はクビライの使いを博多で斬りました。

同じ1279年、郭守敬や(マラーガの天文台でも働いていた)ジャマールウツディーンが、イル・ハー



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ン天文表や各地の観測データなどを基に「授時歴」を完成させました(この優れた暦は、その後、400年にわたって東アジアで使用され続けます)。なお、郭守敬は、天文機械と分離した純粹の水力機械時計を初めて作り、クビライの王宮に設置しました(後日談ですが、洪武帝は、天文台の技師から献上された機械水時計を無益なものとして破砕し、マテオ・リッチによって西洋の錘やぜんまいを動力とする機械時計がもたらされるに及んで、東漢以来発達を遂げてきた中国における機械水時計の歴史は終焉を遂げることとなります)。

1281年、高麗軍と江南軍(南宋の旧軍人が殖民を企図して乗り込んでいました。いわば、職を失った軍人の雇用対策だったのです。因みに、南宋の文官には、官主導の出版事業への就職が奨励されました。この結果、大元ウルスの時代に、中国の出版文化は、そのピークを迎えるのです)が九州に来襲しましたが、再び、暴風雨にあつて撤退しました(弘安の役)。この2回の蒙古襲来を、俗に、元寇と呼んでいます。神風が吹いて日本を救ったという神国思想は、南朝、北畠親房の「神皇正統記」に拠るところが大です。また、元寇という言葉自体は、幕末から明治にかけての国学者が創り出した新しい用語です。なお、足利幕府を開いた足利尊氏は、大元ウルスとの交易を熱心に進め、日本との交易はピークをつけました。モンゴル対策に全力を振り絞った鎌倉幕府は、衰退の道を進むこととなります。また、大量の船舶を失った高麗の海運業も衰退しました。

クビライは、軍事的にも経済的にも圧倒的な力を持っていましたが、晩年は、相次ぐ内乱に悩まされました。ウゲデイ家のカイドウの乱は、1266年から1303年まで続き、チャガタイ・ウルスやジョチ・ウルスを巻き込んで、中央アジアは安定しませんでした。また、東方3王家も、1287年、ナヤンが反乱を起こしました。このあおりで、3回目の日本への遠征は中止されたのです。

クビライは、1294年、80歳で死去しました。カイドウの乱が終結した1303年から、約10年、6代カアン、テムール(~1307)、7代カアン、カイシャン(~1311)の時代が、大元ウルスおよびモンゴル世界帝国の極盛期です。13世紀の後半から14世紀の初めにかけて、中国史上稀に見る空前の出版ブームが巻き起こり、ありとあらゆる書籍が、官民共同で出版された(決して、元曲や平話だけではない)。

13世紀末からは「事林広記」という百科辞典が売り出されました。この辞典が、わが国の文化に及ぼした影響には多大なものがあります。例えば、今日でも使われる「大安」や「仏滅」の観念も、事林広記に拠るものと云われています。私たちが、現在、多くの中国の古典に接することが出来るのも、実は大元ウルスの出版事業によるところが大きいのです。1313年には、王禎の名著「農書(3部作)」が出版され、1314年の科挙復活が、それに拍車をかけました。チャート式や多色刷りの受験参考書の類も登場し、儒教(朱子学)が広く流布して、朝鮮や日本にも(書籍を通じて)広がっていったのです。

地方の廟学や書院には、永久保存を目的とした大字本が送られ、消耗品として小字本も刊行され



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ました。この小字本を日本の僧侶等が購入し、これが五山版の原典となったのです。大元ウルスの時代に集大成された大陸の文化は、五山を通じて、わが国の知識階級に深く浸透し、江戸時代に完成するわが国の文化や諸制度の大本となっていきます。一方、大字本は、紅巾の乱などで官庁が破壊され、大明は文化に背を向けた政権であったこともあって、その殆どが散逸しました。なお、クビライ以降、4 大ウルス(ジョチ、フレグ、チャガタイ、大元)をすべて網羅した実質的なクリルタイは開かれず、カアン位は、クビライ家で世襲されるようになりました。